

レベル別 日本語多読 ライブラリー

にほんご よむよむ文庫

レベル **4** vol.1 **3**

と し しゅん 杜子春

ちゅう ぐく みやこ らくよう せん にん に ど
中国の都、洛陽。仙人に二度、
かね も お金持ちにしてもらった杜子春
は、さん ど め 三度目には「もう、お金はい
らない、仙人になりたい」と言い
ます。せん にん と し しゅん しゅぎょう つ
仙人は杜子春を修行に連れ
ていきますが……。

にほん だいいようてき さつ か あくたがわりゅうの すけ
日本の代表的な作家、芥川龍之介
の作品。

にほんご よむよむ文庫



これは、にほんご べんきょう 勉強している人のための「読みもの」シリーズで
す。4レベルに分かれていて、むかしばなし 昔話、そうさく 創作、めいさく 名作、でんき 伝記などいろ
ろな話があります。レベルごとにことば 言葉やぶんぽう 文法が制限されていて、読
みやすく書かれています。かんじ 漢字には全てひらがなが付いていますか
ら、じしょ 辞書を引かないでどんどん読んでみましょう。

レベル	クラス	語彙数	文字数／1話
1	初級前半	350	400～1500
2	初級後半	500	1500～2500
3	初中級	800	2500～5000
4	中 級	1300	5000～10000

にほんご よむよむ文庫 レベル 4

とししゅん
杜子春

原作（げんさく）：芥川 龍之介（あくたがわ りゅうのすけ）

簡約（かんやく）：栗野 真紀子（あわの まきこ）

挿絵（さしえ）：祖田 雅弘（そだ まさひろ）

監修（かんしゅう）：NPO法人日本語多読研究会（にほんご たどく けんきゅうかい）

<監修者紹介>

NPO法人 日本語多読研究会 (にほんご たどく けんきゅうかい)

当研究会は、学習者のための「読みもの」を作ること^{つく}を目的^{もくてき}に、日本語教師^{にほんご ぎょうし}が集^{あつ}まって、2002年1月に発足^{はつそく}しました。2006年9月にNPO法人^{ねん がつ}になりました。「レベル別読みもの」を開発^{べつ}したり、それらを使^{つか}った「多読」授業^{たどく じゅぎょう}の実践^{じっせん}・研究^{けんきゅう}をしたりしています。http://www.nihongo-yomu.jp

レベル別日本語多読ライブラリー (にほんご よむよむ文庫)

[レベル4] vol.1

杜子春

2006年10月10日 初版 第1刷 発行

2008年 9月29日 初版 第2刷 発行

原作：芥川 龍之介

簡約：栗野 真紀子 (日本語多読研究会会員・日本語教師)

作画：祖田 雅弘

監修：NPO法人 日本語多読研究会

ナレーション：山中 いっとく

録音・編集：スタジオ グラッド

デザイン・DTP：有限会社トライアングル

発行人：天谷 修平

発行：株式会社アスク出版

〒162-8558 東京都新宿区下宮比町2-6

TEL.03-3267-6864 <http://www.ask-digital.co.jp>

印刷・製本：株式会社光邦

許可なしに転載・複製することを禁じます。

乱丁・落丁はお取り替えます。

©NPO法人 日本語多読研究会 2006

Printed in Japan ISBN978-4-87217-627-8

にほんご よむよむ文庫 レベル 4

と し しゅん
杜子春

原作（げんさく）：芥川 龍之介（あくたがわ りゅうのすけ）

簡約（かんやく）：栗野 真紀子（あわの まきこ）

挿絵（さしえ）：祖田 雅弘（そだ まさひろ）

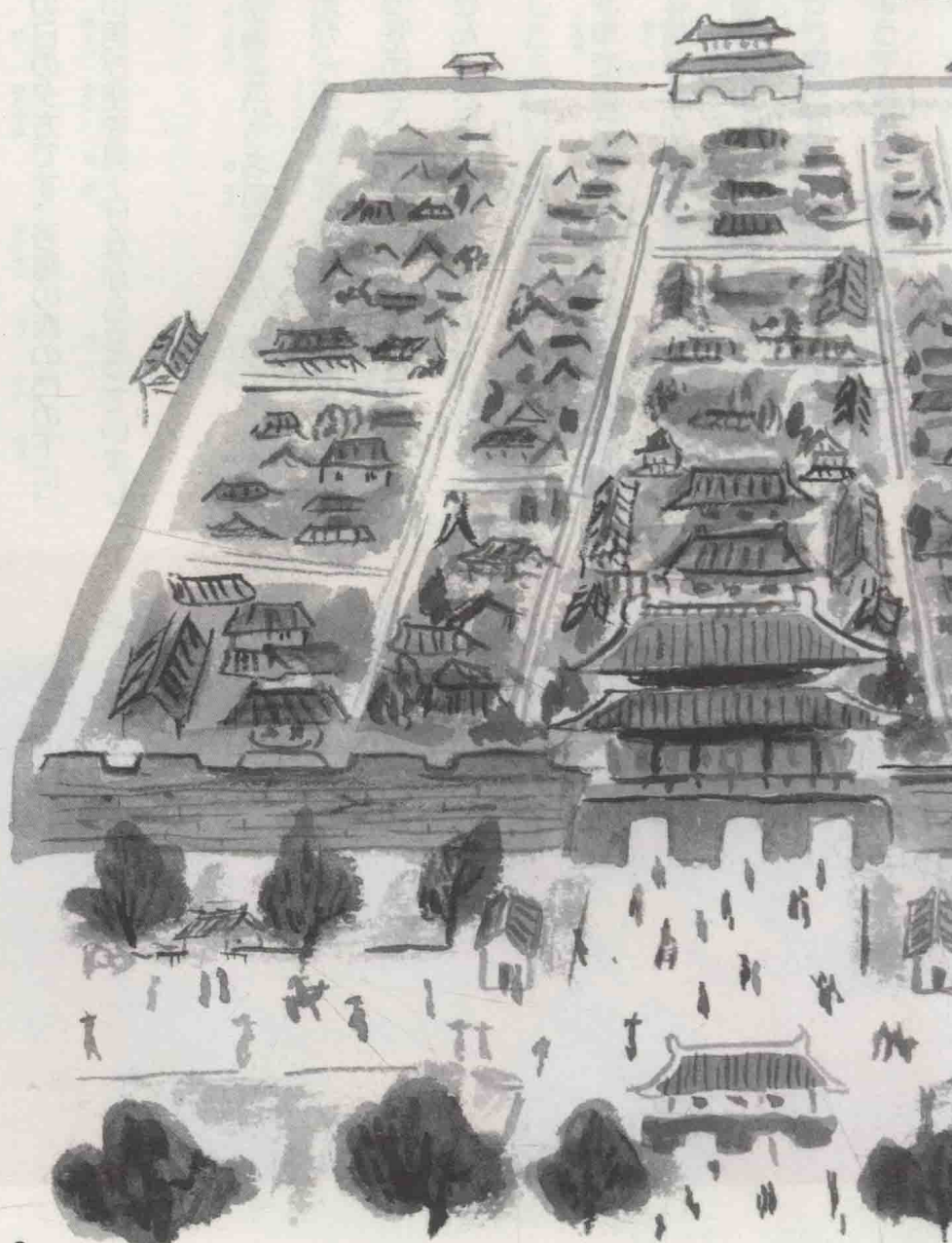
監修（かんしゅう）：NPO法人日本語多読研究会（にほんご たどく けんきゅうかい）

これは、昔々、今から千五百年ぐらい前の中国（唐）の町、洛陽のお話です。

昔の中国の町は、周りを壁で囲まれていました。そして、東、西、南、北にそれぞれ町へ入る門がありました。他の町や外国から来た人たちはみんな、この門を通して町の中に入っていくのです。

洛陽は、そのころ、中国で一番大きな町でしたから、毎日たくさんの人がこの門から出たり入ったりしていました。

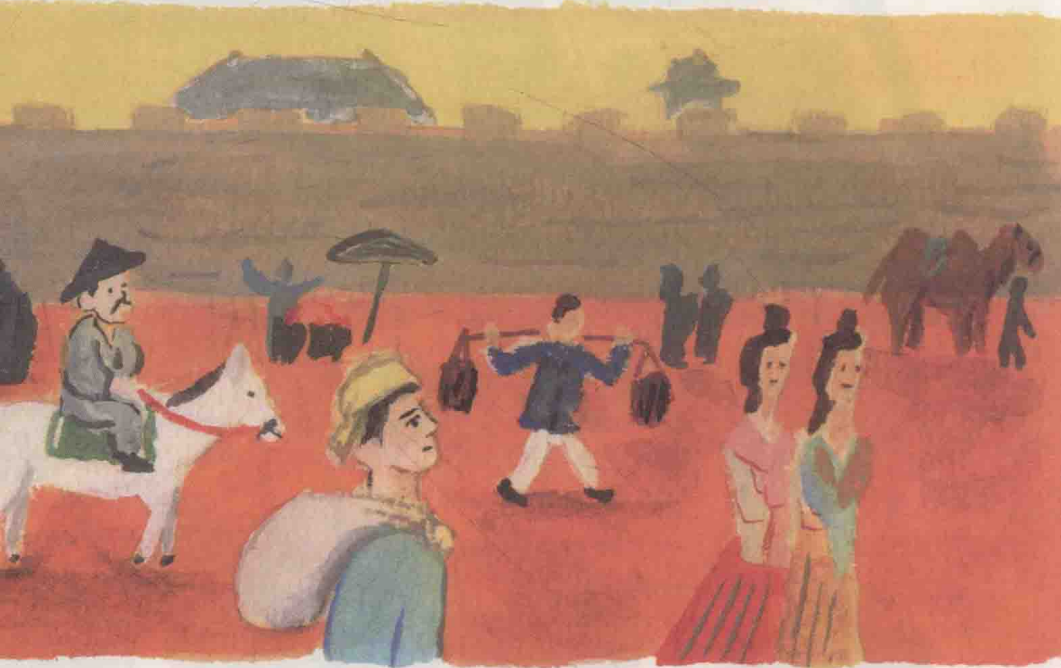




ある春の日の夕方です。洛陽の西の門の下に、
一人の若い男が空を見上げながら立っていました。

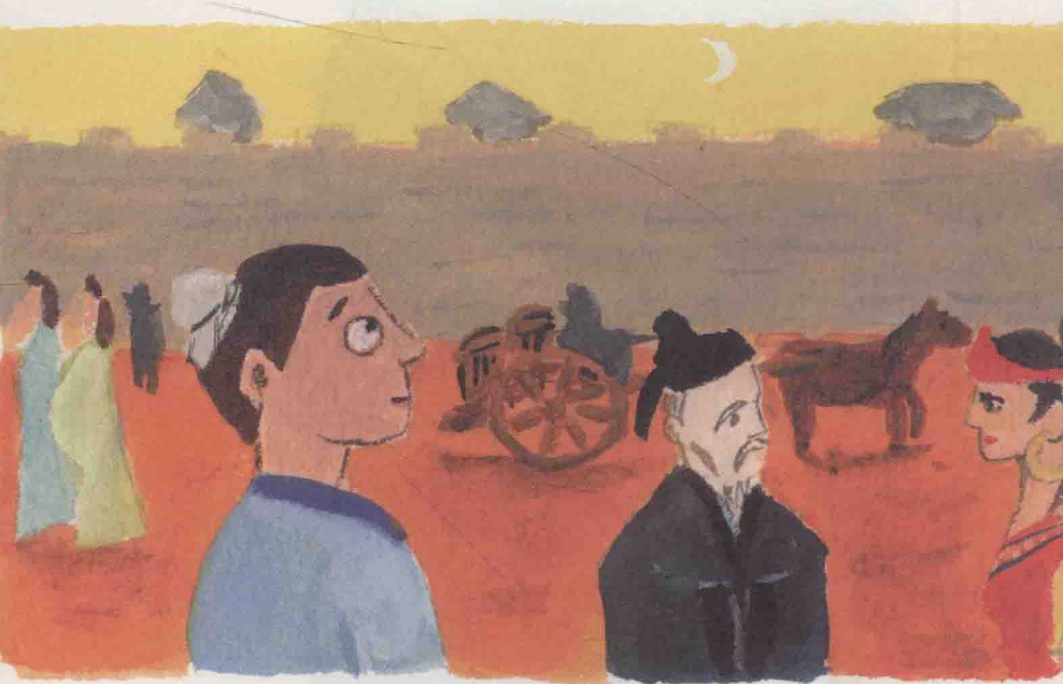
男は杜子春という名前でした。金持ちの家の
息子でしたが、両親が死んだ後、お金を全部使
ってしまったので、今は、住む家も食べる物
もありません。

道は人や車でいっぱいでした。夕日の光の中
をきれいな帽子をかぶった老人や、きれいな服
を着た外国の女の人や、荷物をたくさん載せた
白い馬などが通りすぎていきます。それは、ま
るで絵のようでした。



しかし、杜子春は、門の前に立って、ぼんやり空ばかり見ていました。空には細い月が、もう薄く白く見えていました。

——日が沈んで、暗くなってきた。おなか
もすいたし、泊めてくれるところもないし……。
どうしたらいいんだろう……。もう生きているより、川へ飛び込んで死んでしまった
ほうがいいかもしれない ——
杜子春は、さっきから心の中でこんなことを
思っていました。



すると、どこからやって来たのでしょうか。

ひとり 老人が杜子春の前で足を止めました。

老人は杜子春の顔をじっと見て、

「おまえは何を考えているのだ?」

と言いました。

「私ですか。私は今夜、寝る所もないので、

どうしようかと考えているのです」

杜子春は老人に急に尋ねられたので、びつ

くりして、思っていたことをそのまま言っ

てしまいました。老人は、

「そっか。それはかわいそうだな」

と言いました。杜子春は恥ずかしくなって、

下を向いてしまいました。



老人は、しばらく何か考えているようでした。そして、言いました。

「いいことを教えてやろう。今、この夕日の光の中に立ってみなさい。おまえの影が地面に映るから、その影の頭のところを、夜、掘ってみなさい。きっと車にいっぱい金の出てくるから」

「本当ですか」

下を向いていた杜子春は、驚いて顔を上げました。しかし、老人はどこへ行ったのか、もうそこにはいませんでした。

辺りは暗く、空の月は、前よりも白くはつきり見えました。

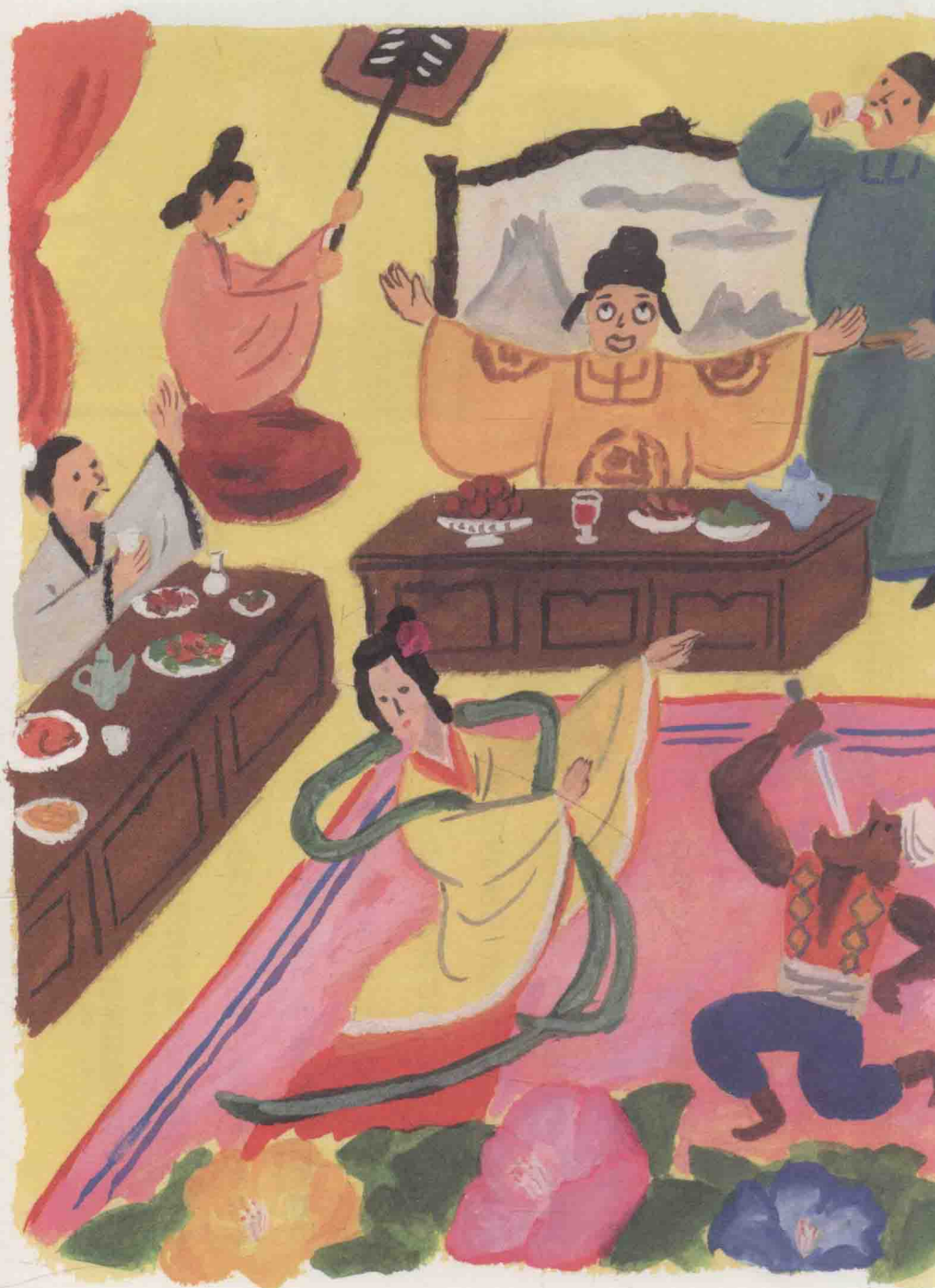


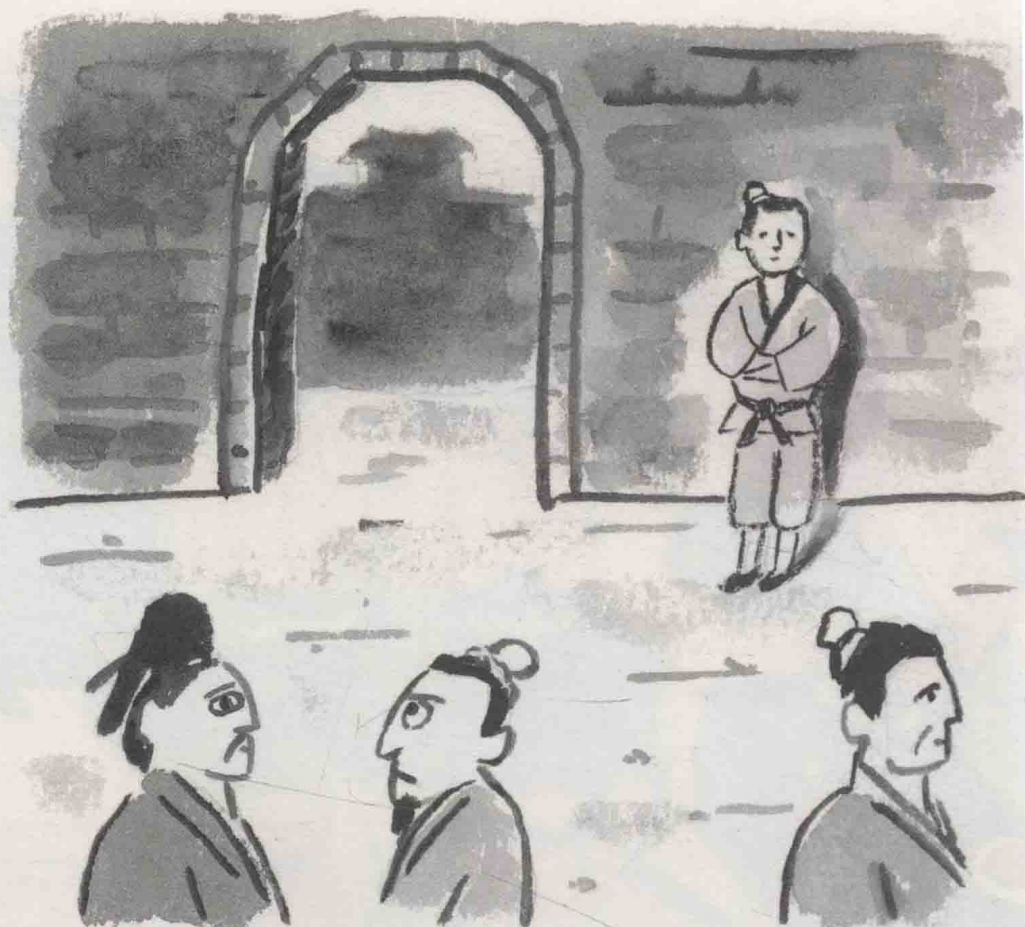
杜子春は、一晩で洛陽で一番の大金持ちになりました。あの老人の言葉通り、自分の影の頭のところを、夜、掘ってみたら、大きな車にいっぱいのお金が出てきたのです。

大金持ちになった杜子春は、すぐに立派な家を買いました。そして、世界中の珍しいもの、有名なものを買いました。高い酒や食べ物、日に四回色が変わる花、外国の美しい鳥、いす、車、服……。

すると、これを聞いて、今までは道で会ってもあいさつもしなかった人たちが、毎日遊びに来るようにになりました。その数は毎日増え、とうとう、町で杜子春の家に遊びに来ない人は、一人もいなくなりました。

杜子春は、この客たちと毎日酒を飲みました。杜子春が、金の茶碗で西洋の珍しい酒を飲んでみると、目の前で、インドの魔法使いが魔法を見せたり、髪にきれいな花を飾った女たちが、その周りで、踊ったり歌ったりしました。





しかし、お金かねは使つかえばなくなり
 ます。杜子春とししゅんも、一年いちねん、二年と
 過ぎて、だんだん貧乏びんぼうになりました
 た。すると、昨日きのうまで毎日まいにち来きてい
 た友ともだちも、もうだれも遊あそびに來
 なくなりました。門もんの前まえを通とおって
 も、あいさつもしなくなりました。
 とうとう三年目さんねんめの春はる、お金かねは
 全部ぜんぶなくなりました。家いえもなくな
 りました。杜子春とししゅんを泊とめてくれ
 る人ひとはだれもいません。一杯いっぱいの水みづ
 をくれる人ひともいなくなりました。

そこで、杜子春は、ある日の夕方、もう一度あの洛陽の西の門の下へ行つて、ぼんやり空を見上げながら立っていました。すると、やはり前のように、老人がどこから出てきて、

「おまえは何を考えているのだ？」

と言いました。

杜子春は老人の顔を見ると、恥ずかしそうに下を向いて、しばらくは返事をしませんでした。

しかし、老人はその日も親切そうに同じことを聞くので、杜子春も前と同じように、

「私は今夜、寝る所もないので、どうしようかと考えているのです」

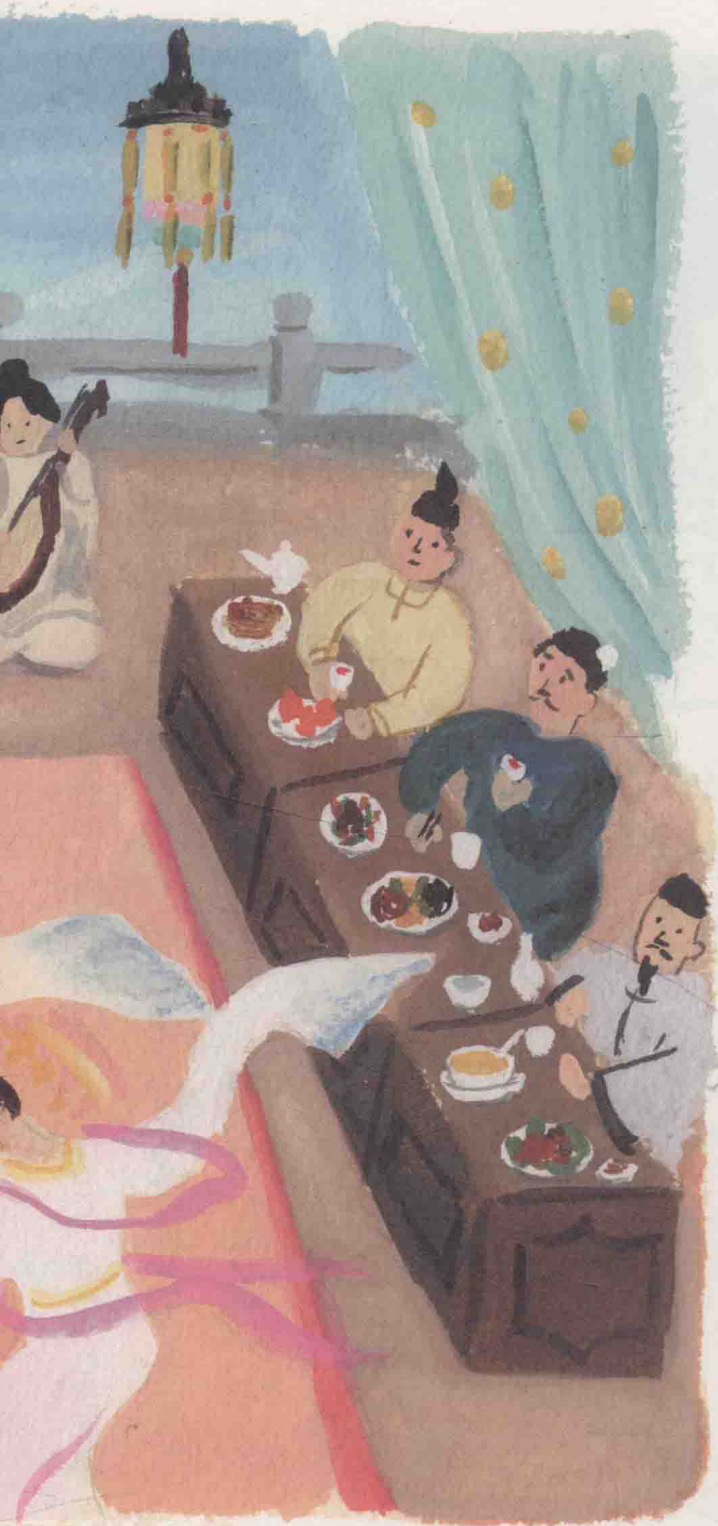
と、返事をしました。

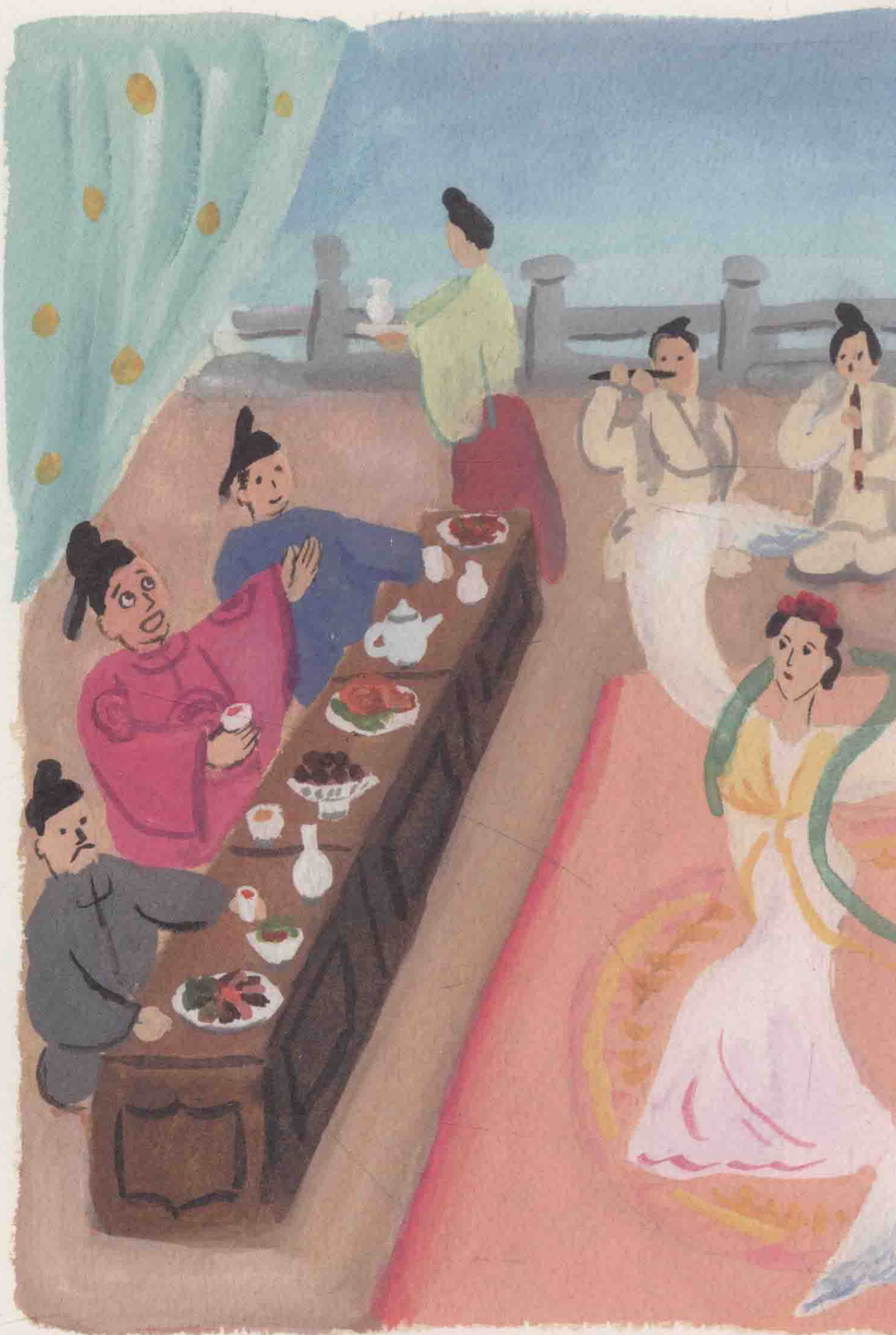
「そうか。それはかわいそうだな。では、いいことを教えてやろう。今、この夕日の中に立ってみなさい。おまえの影が地面に映るから、その影の胸のところを、夜、掘ってみなさい。きっと、車にいっぱい金が出てくるから」

老人はこう言つと、今度もまた、通りを歩くたくさんの人々の中に消えてしまいました。

杜子春は、その次の日からすぐに、町で一番の金持ちになりました。そして、またたくさんお金を使い始めました。珍しい花、美しい鳥、インドの魔法使い……。全部前と同じです。

ですから、車にいっぱいあったたくさんの金も、三年過ぎると、全部なくなっていました。





「おまえは何を考^{かんが}えているのだ？」

老人は杜子春の前へ来て、同じことを聞きました。これで三回目です。もちろん杜子春は、そのときも洛陽の西の門の下で、ぼんやり空を見上げながら立っていました。

「私^{わたし}ですか。私は今夜、寝る所もないので、どうしようかと思っているのです」

「そうか。それはかわいそうだな。では、いいことを教えてやろう。今、この夕日の中に立ってみなさい。お前の影が地面に映るから、その影のおなかのところを、夜、掘ってみなさい。きつと車にいつぱいの……」

老人がここまで言うと、杜子春は急に手を上げて、その言葉を止めました。

「いや、お金はもういららないのです」

「金はもういらない？ では、とうとう金をたくさん使うことがつまらなくなつたんだな」

老人は杜子春の顔をじつと見ました。